享化粧萬年島田

初篇
貳篇

A 392
1

紅英堂文庫

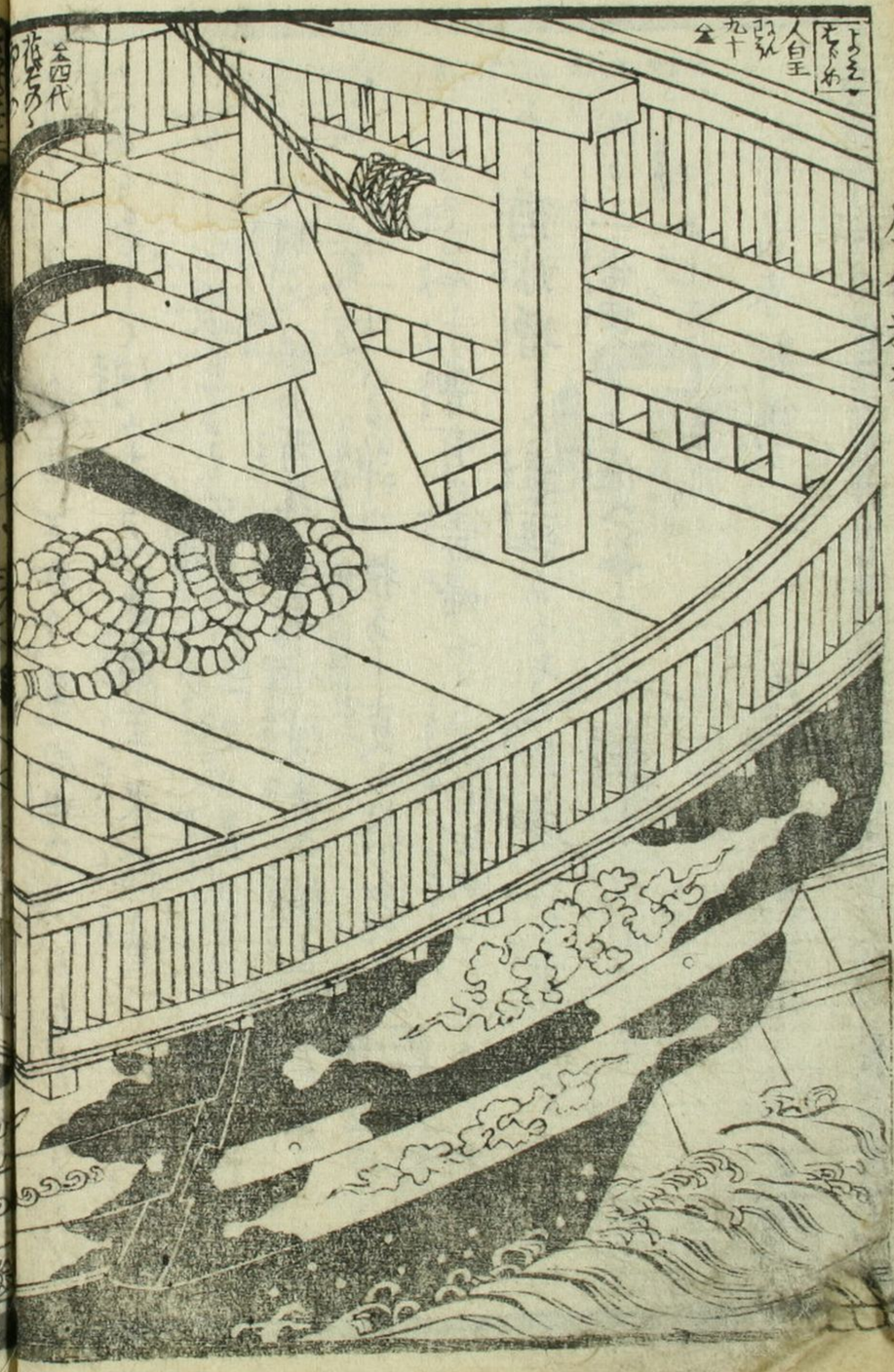
48-7627

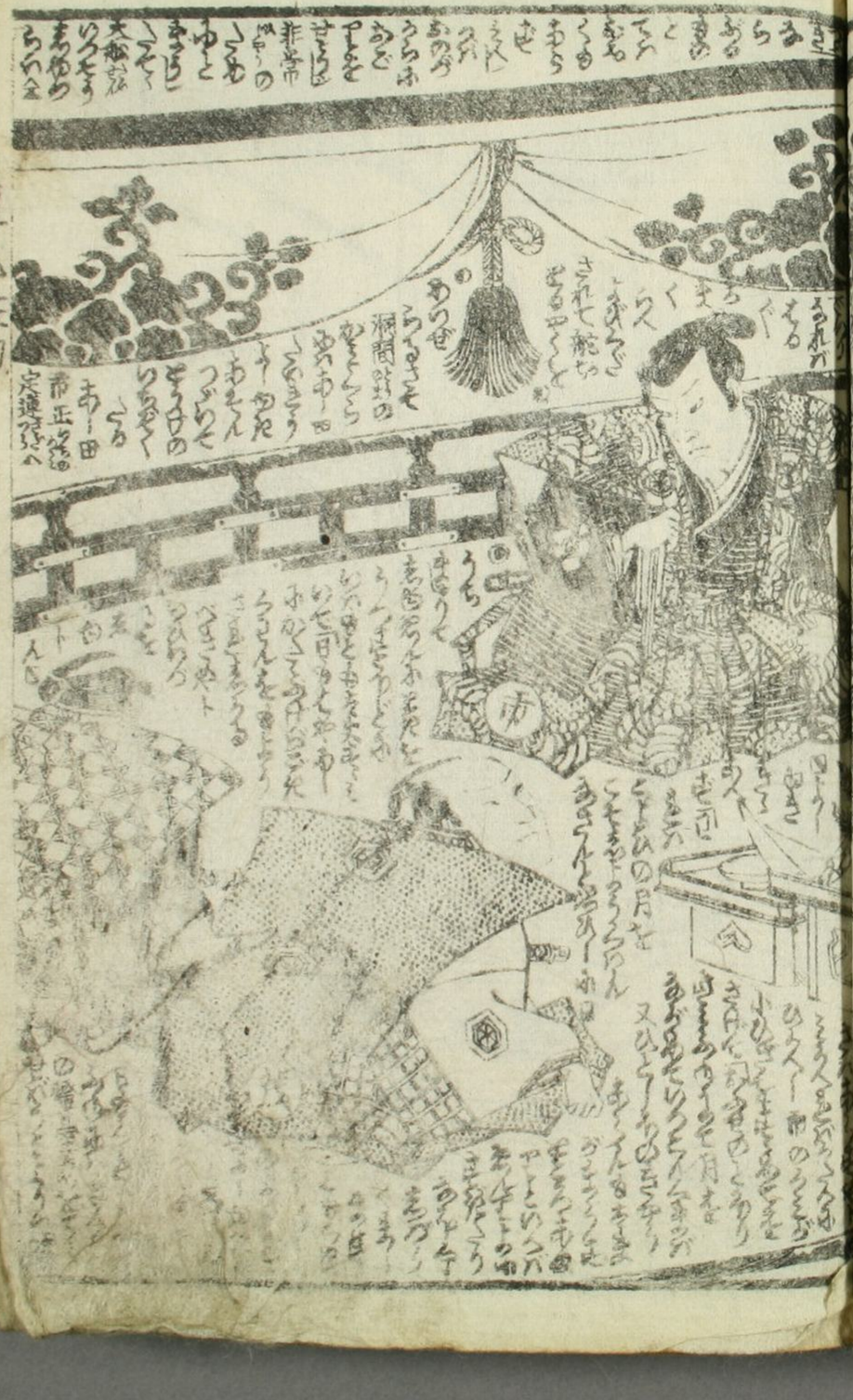
芦田大領光之
孝女小露
葉川乙女之助惟美

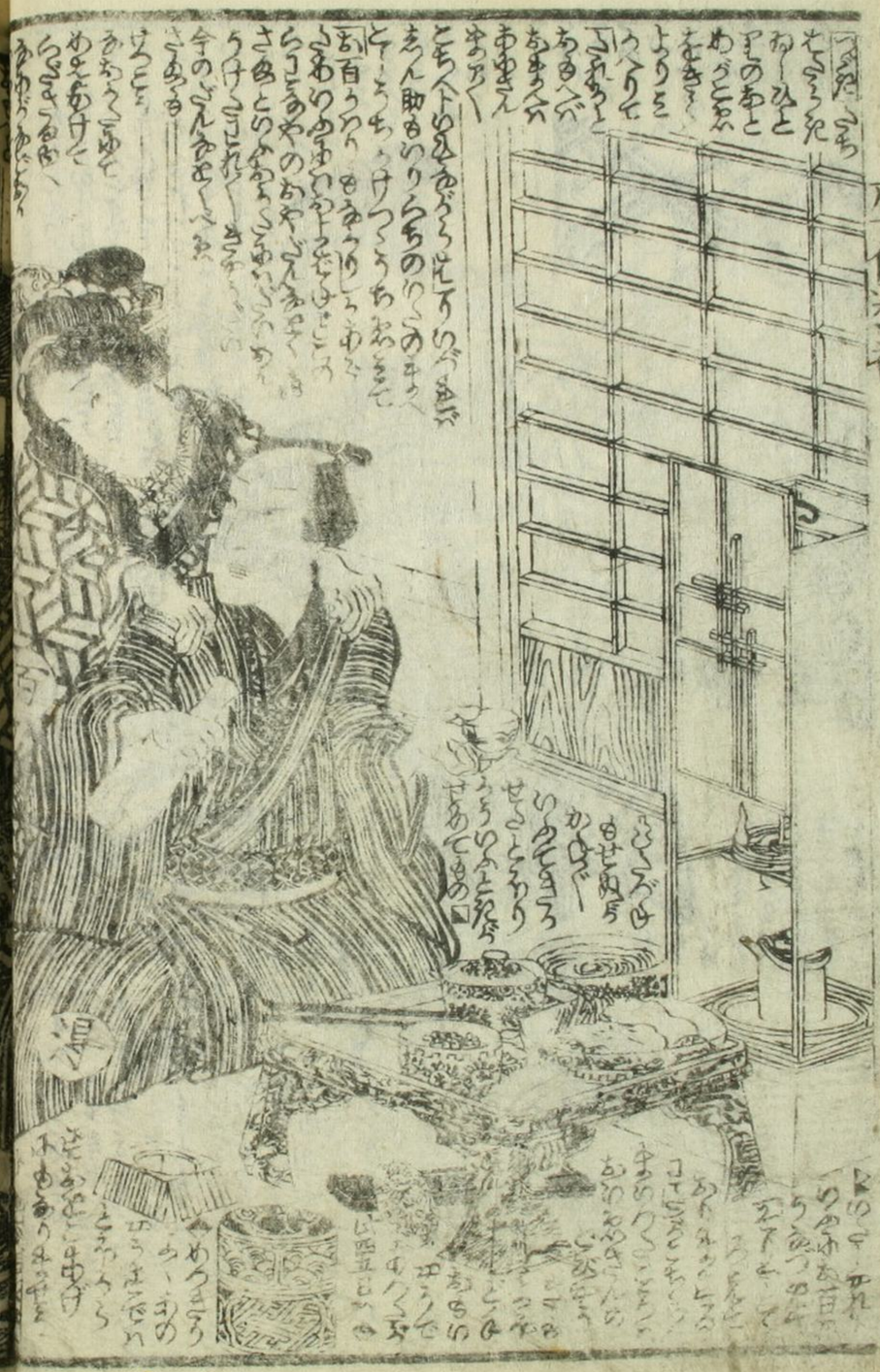
今に生まれて邈古を知り。見ぬ世の人を友とする吏。
史ならずして何かあるべき。僕年来釋童のために。數種
の策子を綴まるもの。多くは一時の戯墨にて春日秋夜の
徒然を慰めんとの所爲なるに。今復爰に編出せるも。なほ一硯の
濁江に齋一生なる萍の根なし吏にはなれども。近世阿白と
喚まれる古今未曾有の毒婦なり。虚名を妲己といふからに那紂王の
妃にも猶弥増して毒惡なる。その物語に枝葉を添へし茲に
初編の三番叟から。他へはゆらじと板元が机の上より携へ往て
聽て梓に上せるにすん。

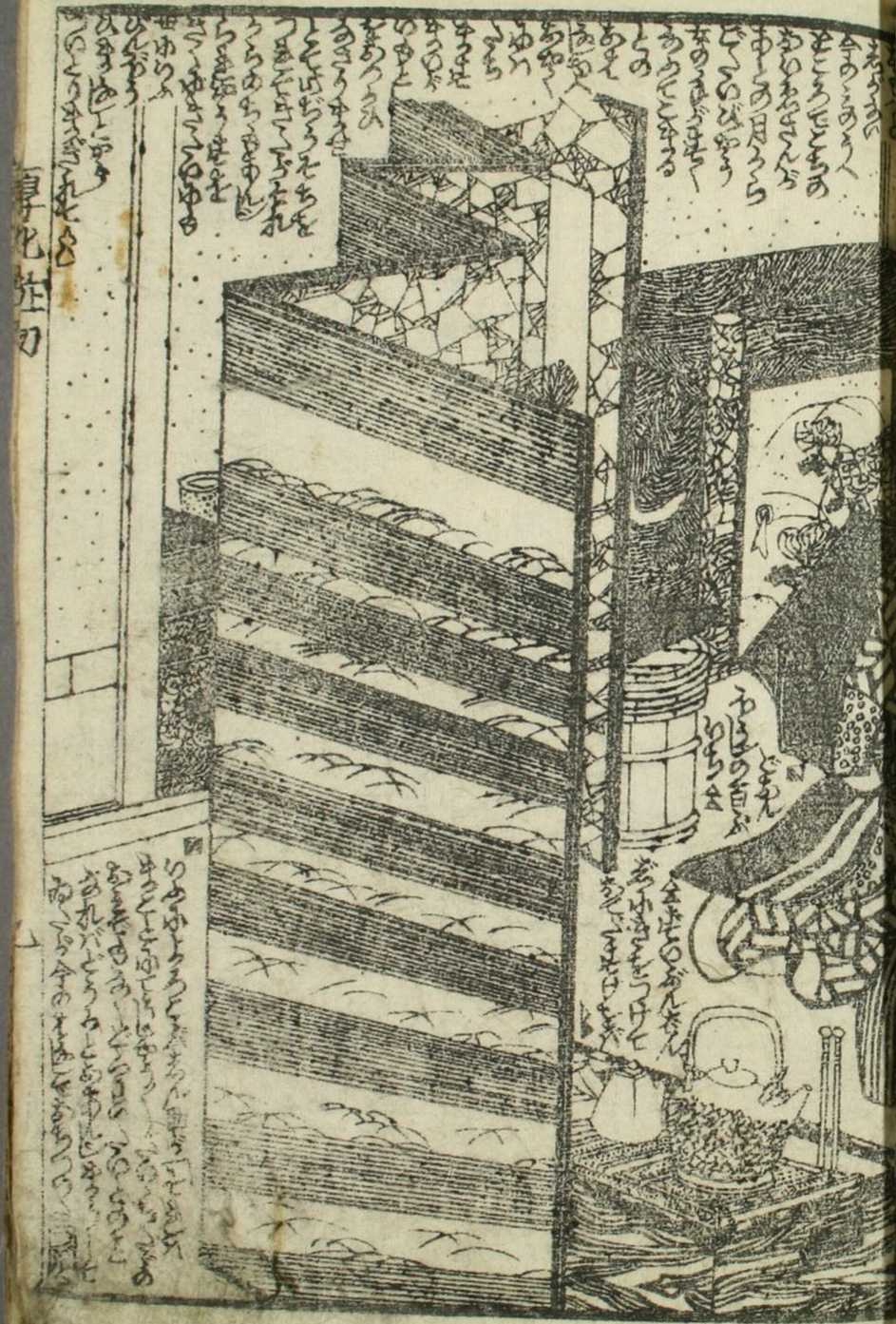
戊辰孟春新鐫

爲永春水記









春水作國貞画

實母散

本家

私方実母さんの発ハ中さんに有てんオ川 一目ゆゑハ
ひて年来賣ひ来り其事ハ居ませるゆゑ氏同所
向まゐらせ引うけ申ゆゑ此事ハ何ハ発ハ
中橋南傳馬 一目東ゆゑ
一葉堂孝輔製

鼠祠通夜譚

四編 八編 出板

柳亭樺彦作
梅蝶樓國貞画

厚化粧萬年嶋田

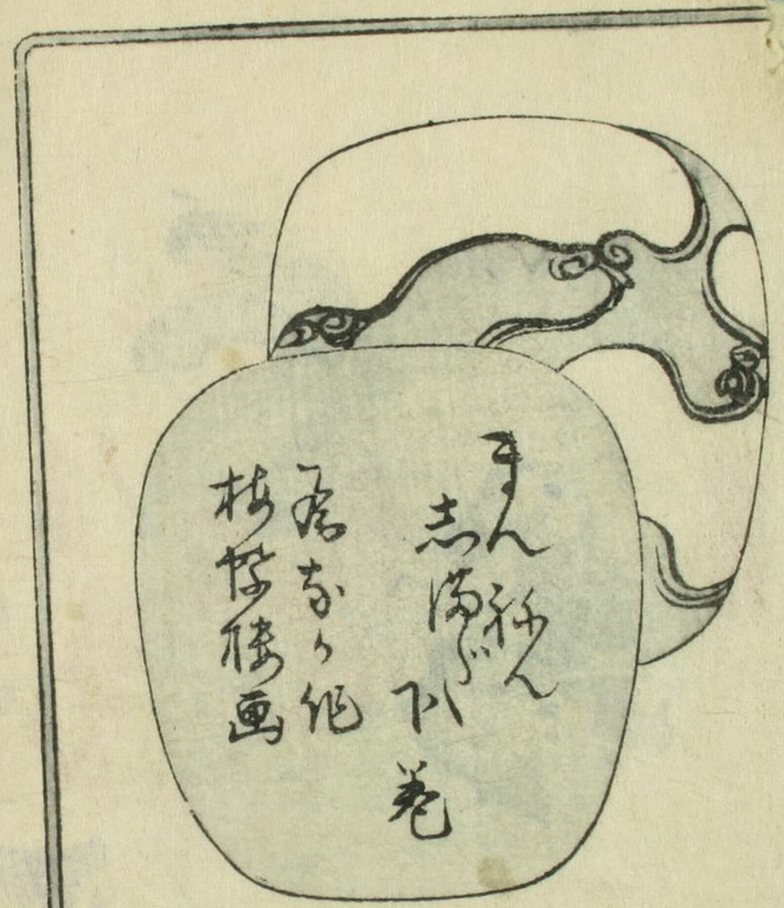
初篇 追々出板

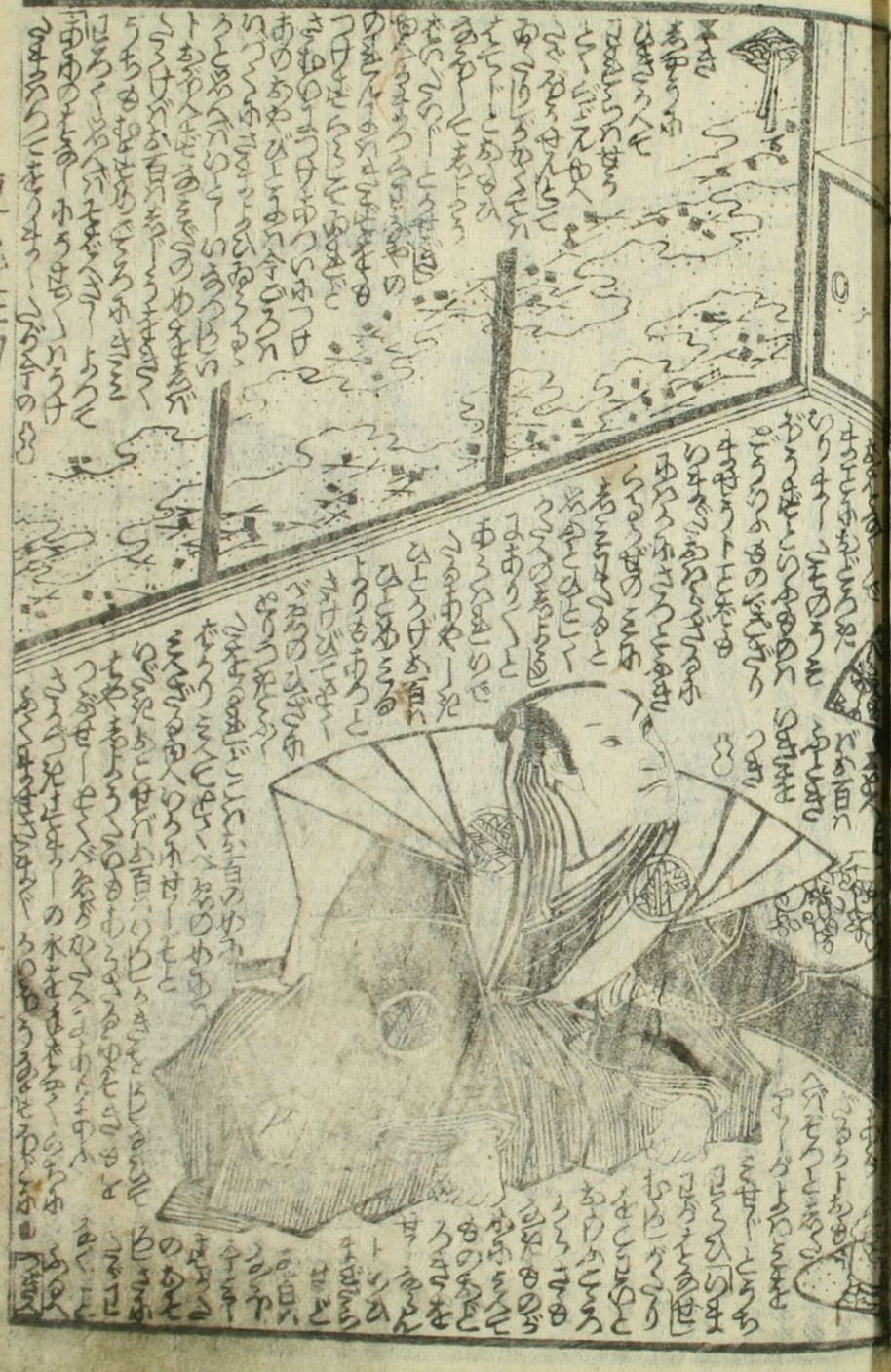
爲永春水作
梅蝶樓國貞画

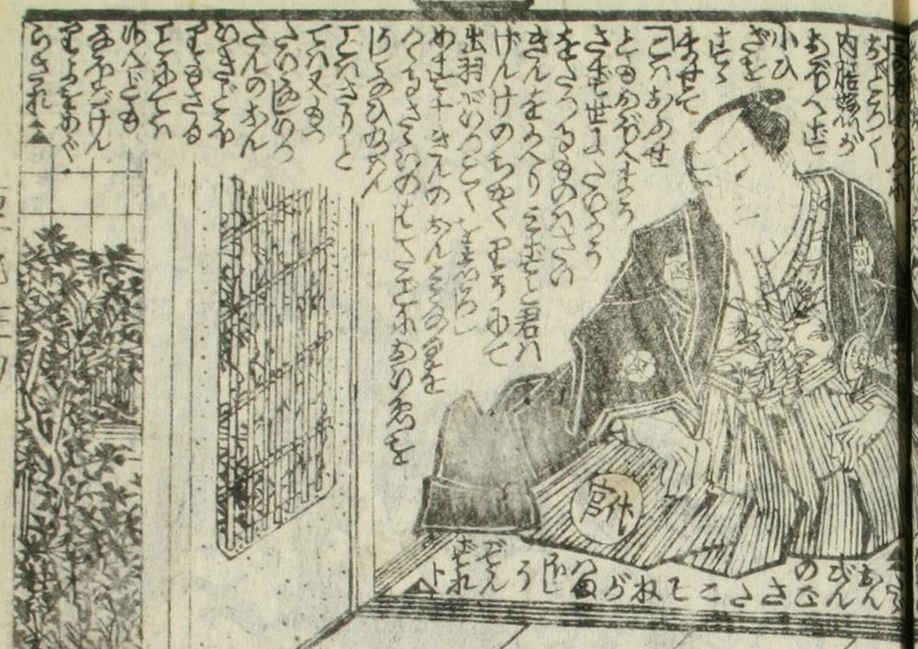
春軒さん

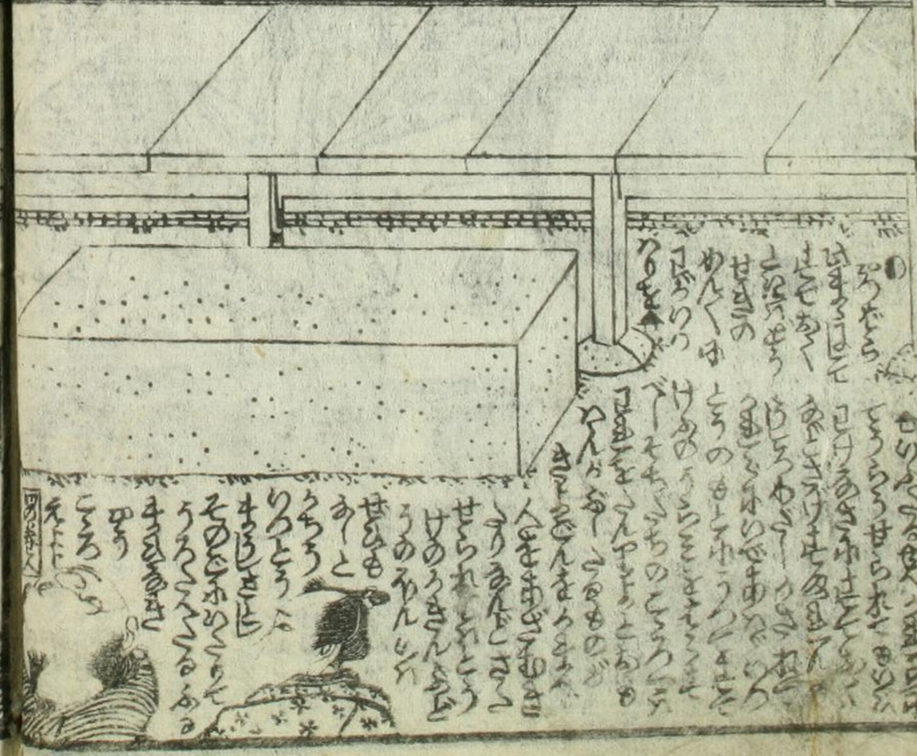
這ハ世に普く沙汰せらるゝ姐己阿百が傳にして是に和尚魚の惡霊
魚練芦田の家に仇做んとして美に忠臣差をなりて渠が毒手に苦さ
ゐとせらる衰まゐりて花やかに宜く理のはたらし草双紙にまん

得兵衛が妻阿發二個が情曲なる
躰を窺ふ繹ハ次の編に委し

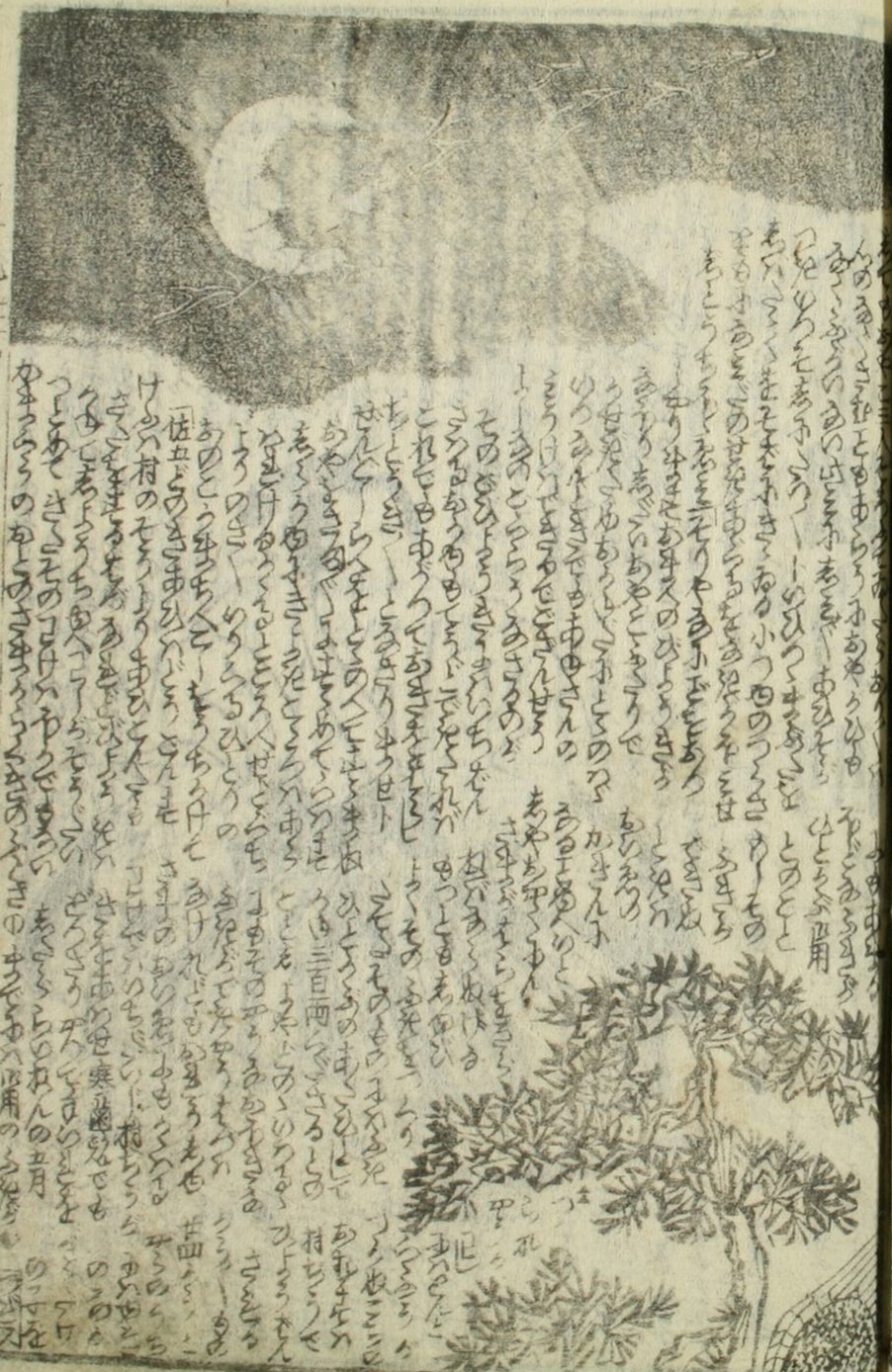

まん稱ん
志満ぶ下巻
落なり絶
桜梅樓画







佐



春水作國貞画

慶應四年戊辰陽春閏杖標目

新局九尾傳 七編 十一編 爲永春水作 梅蝶樓國貞画

室町源氏胡蝶巻 十二編 十三編 十四編 十五編 種彦作 國貞画

筆海四國聞書 十一編 十二編 十三編 種彦作 國貞画

假名清談戀畦會 四編 大尾 如皐作 國貞画

明鴉墨画廼福 十三編 十四編 十五編 種彦作 國貞画

童謡妙々車 廿二編 廿三編 廿四編 種彦作 國貞画

花封答玉章 十編 大尾 種彦作 國貞画

薄俤幻日記 十七編 十八編 十九編 春水作 國貞画

八犬傳犬の双紙 四十編 五十編 五十編 種彦作 國貞画

七ゆき葛飾譚 九編 十編 十一編 種彦作 國貞画

南傳馬川書 十一 鶴屋

二編上

厚化粧美年
山田二編上
春水著
國貞畫

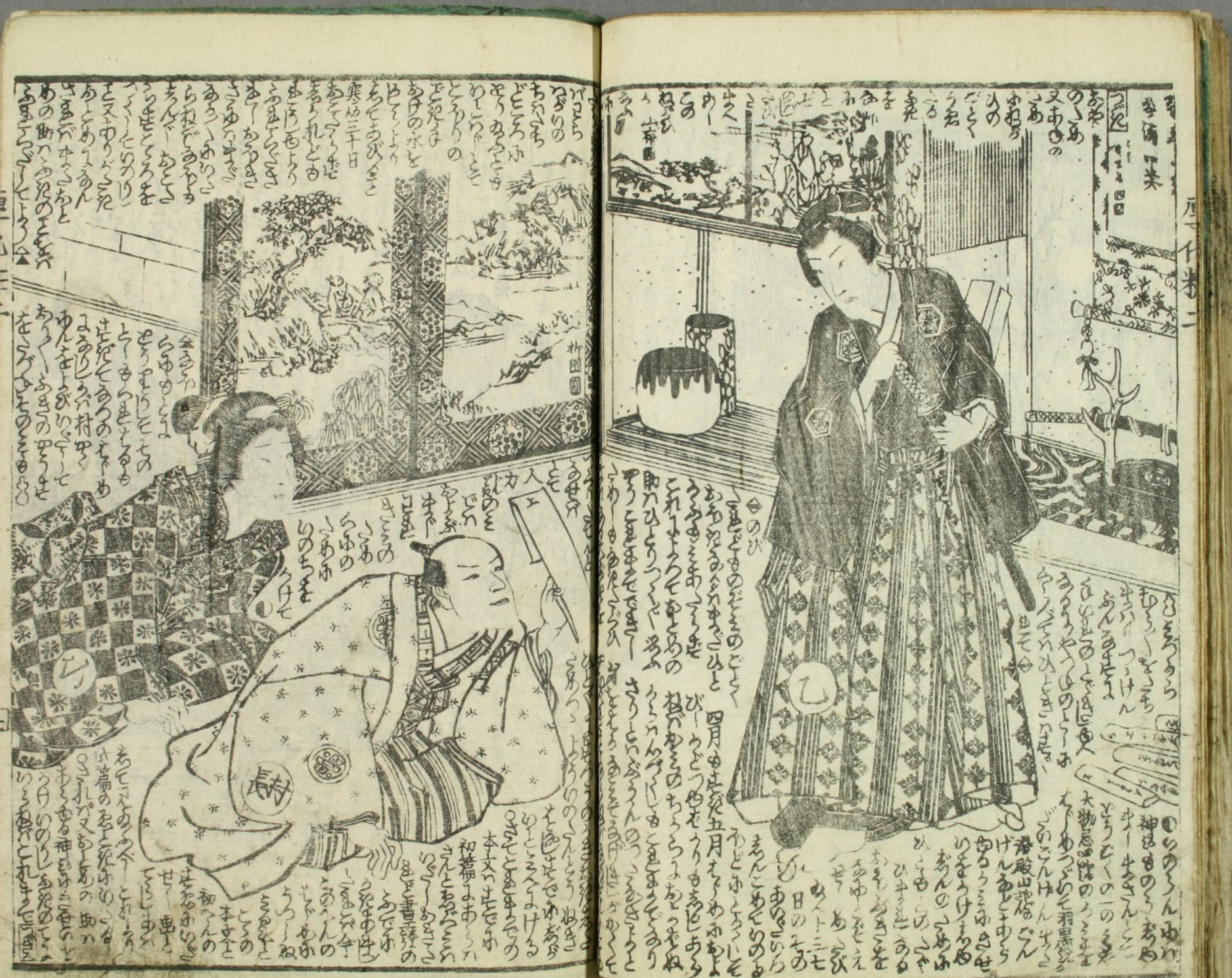
菜蕗といふも草の名。茗荷といふも草の名とハ琴の名にはふ組唄なるが。その蕗をもて序開きの趣向になし。たる冊子なれど。水蕗の和らかさに。那蕗の薹の苦さを加へ。香に匂ハせる味こそもなれ。作者が筆の摑ミ料理。世話と時代の切和物ハおん目の肥こ看官の。迎もお口に合ふまじと思ひの他に初編から。駄物ながらも御意に入り。爰に二編のお替りを需めらるゝに乗りが来てく胡广より先へ摺る墨の曲り形にも編を重ねば。書房が鄽の富貴自在。かの黄金の得ありてく。冥加ならせなんとしかいふ。

戊辰
新春

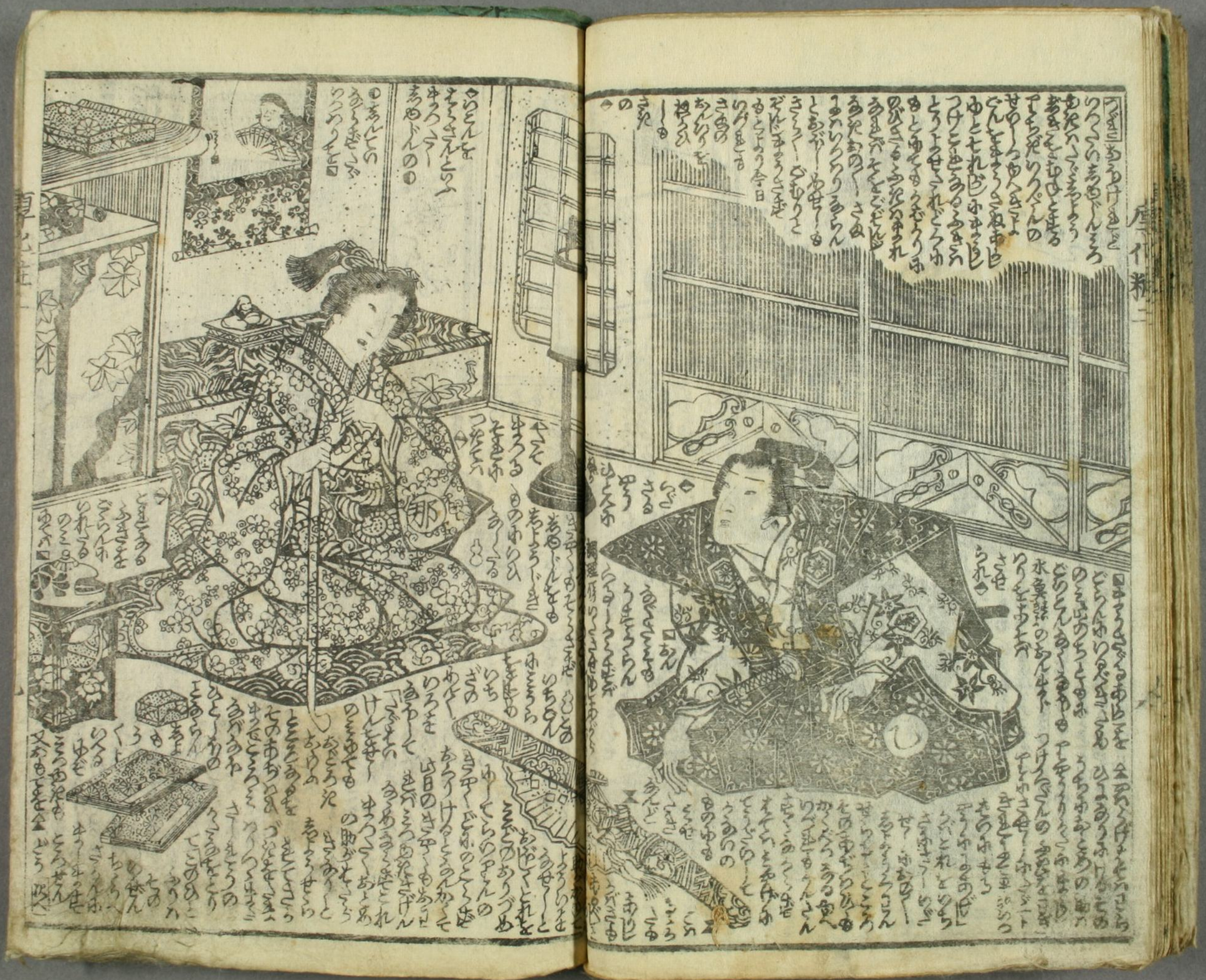
爲永春水記

芦田前の大領芳之
姆
正木
丹後が女兒那曳

宇留馬
丹後季晴



法服
永喜
寫

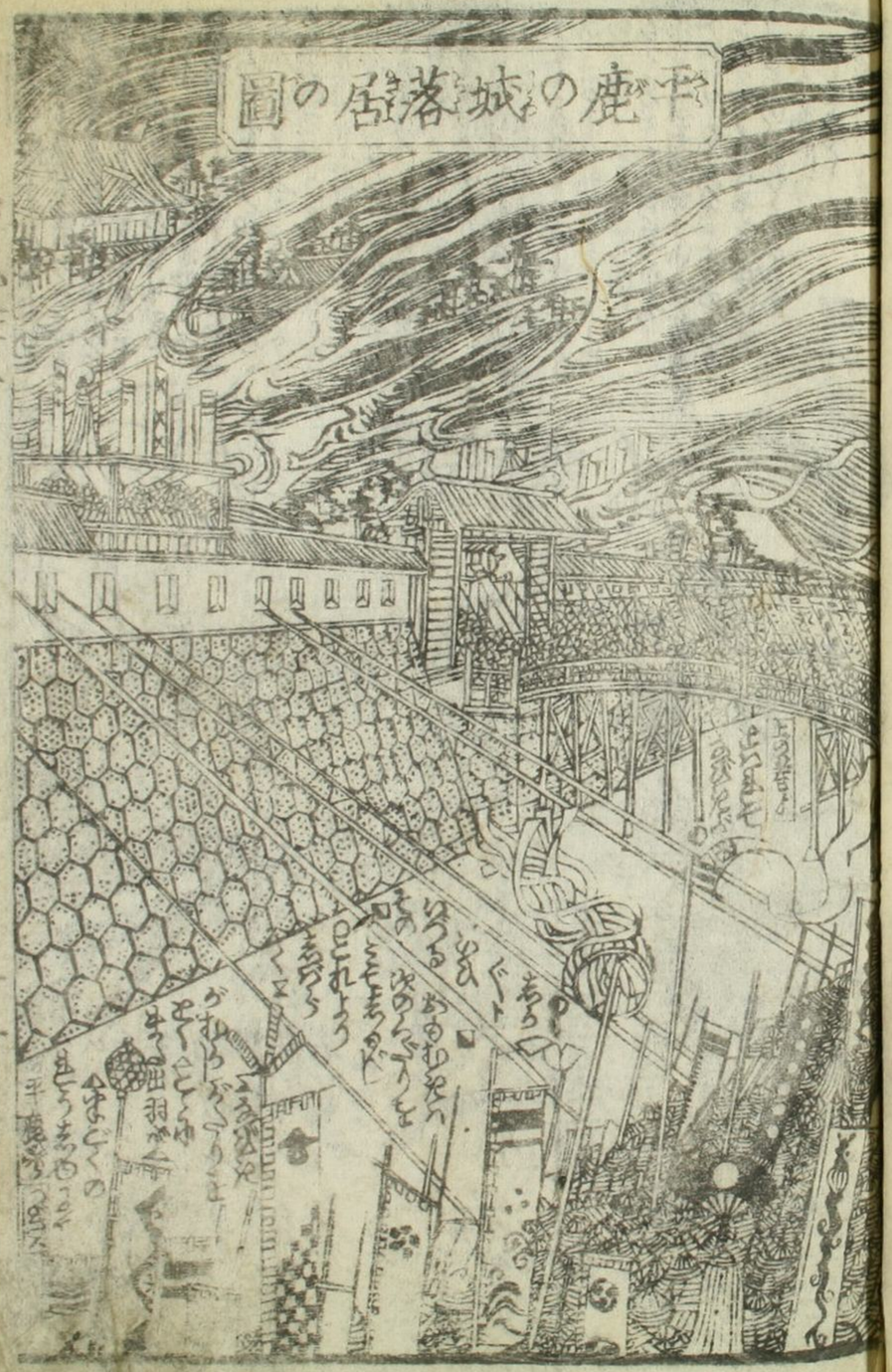


梅樓画

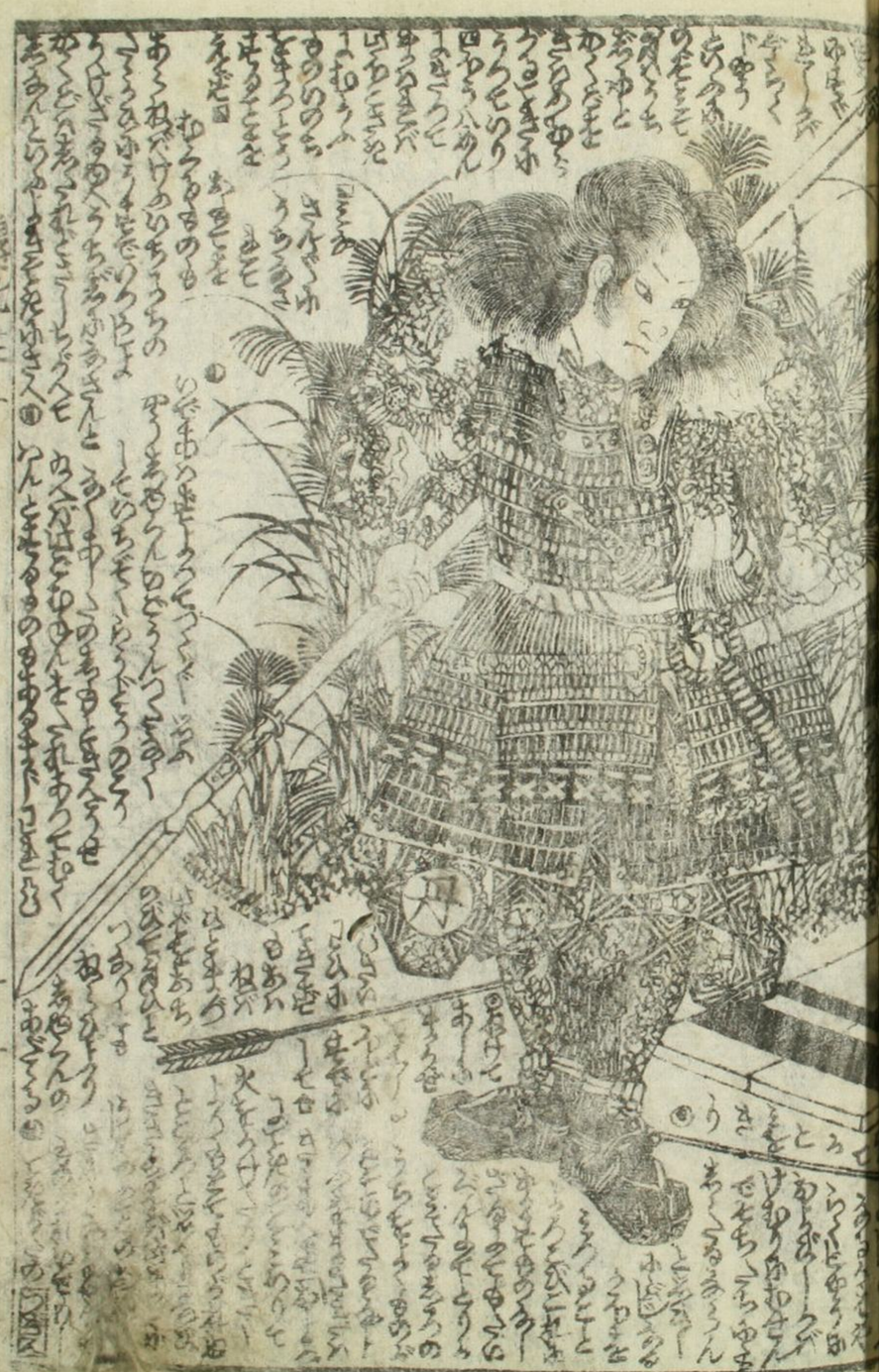
二編下

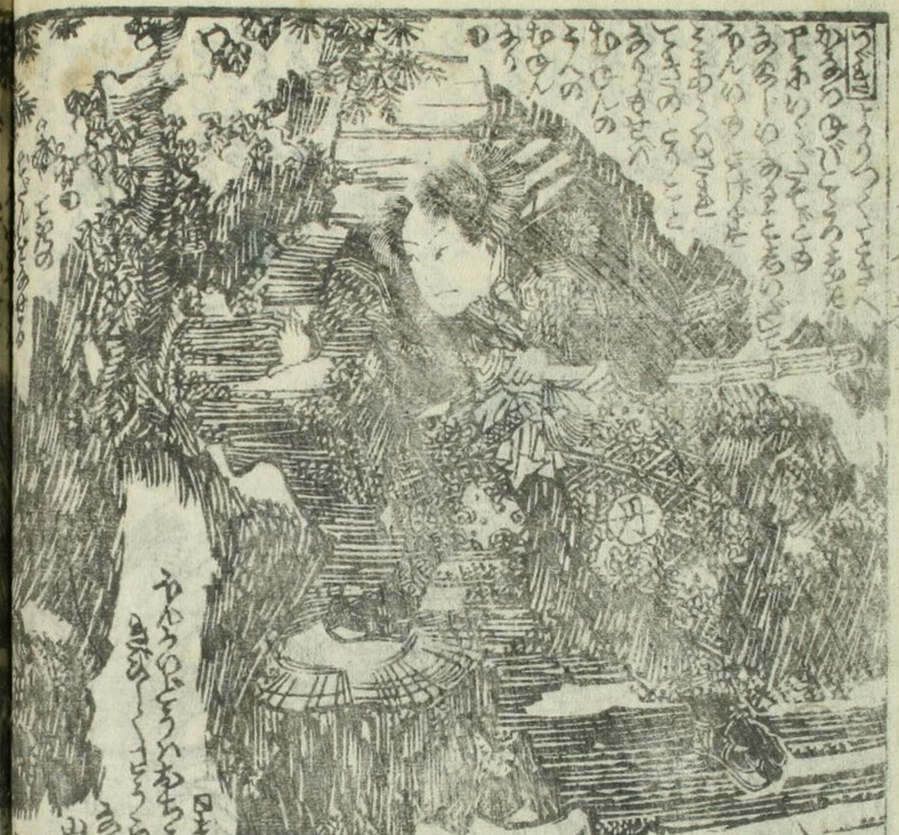
春水作

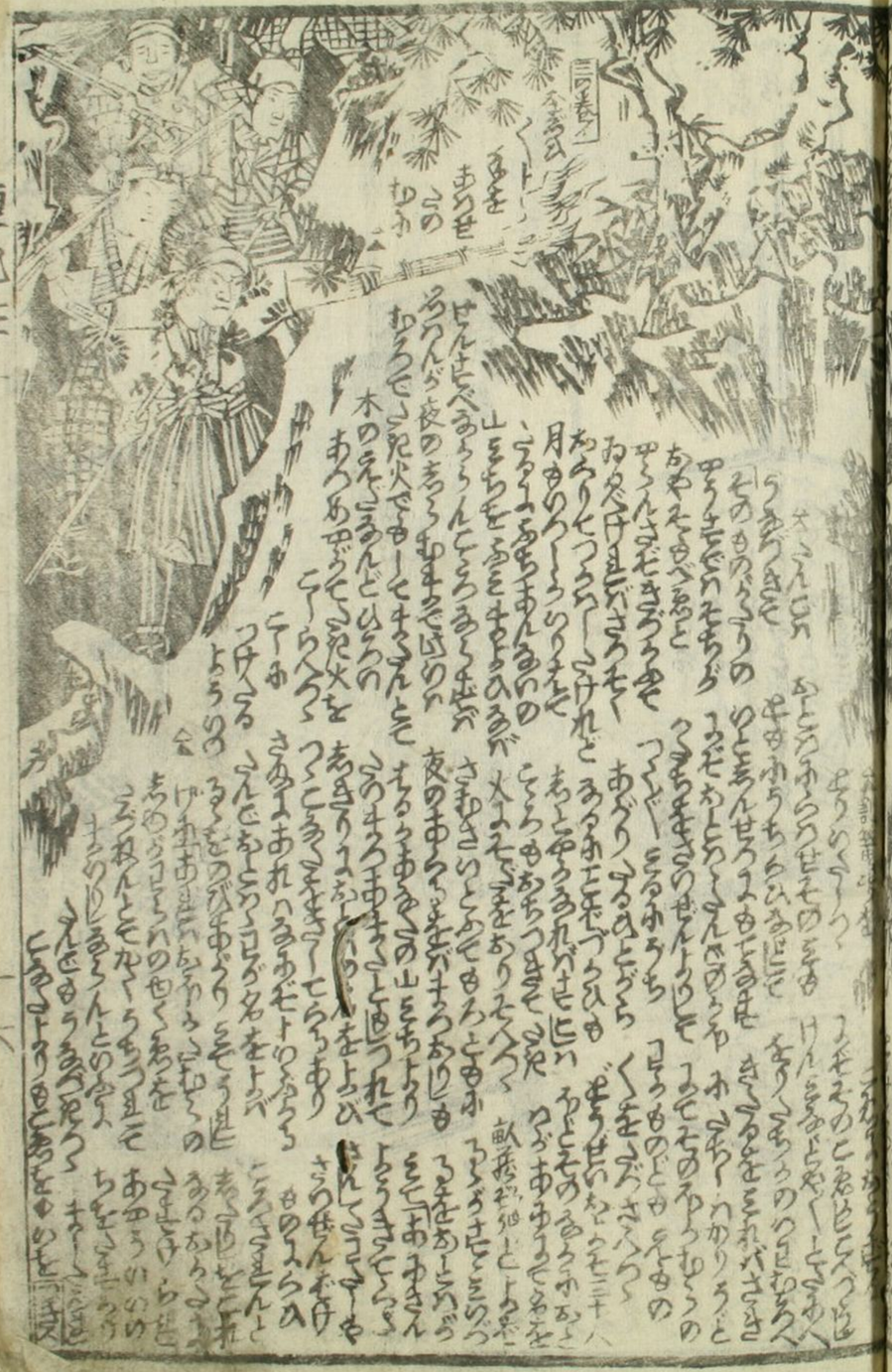
國貞画


平鹿の城落居の圖

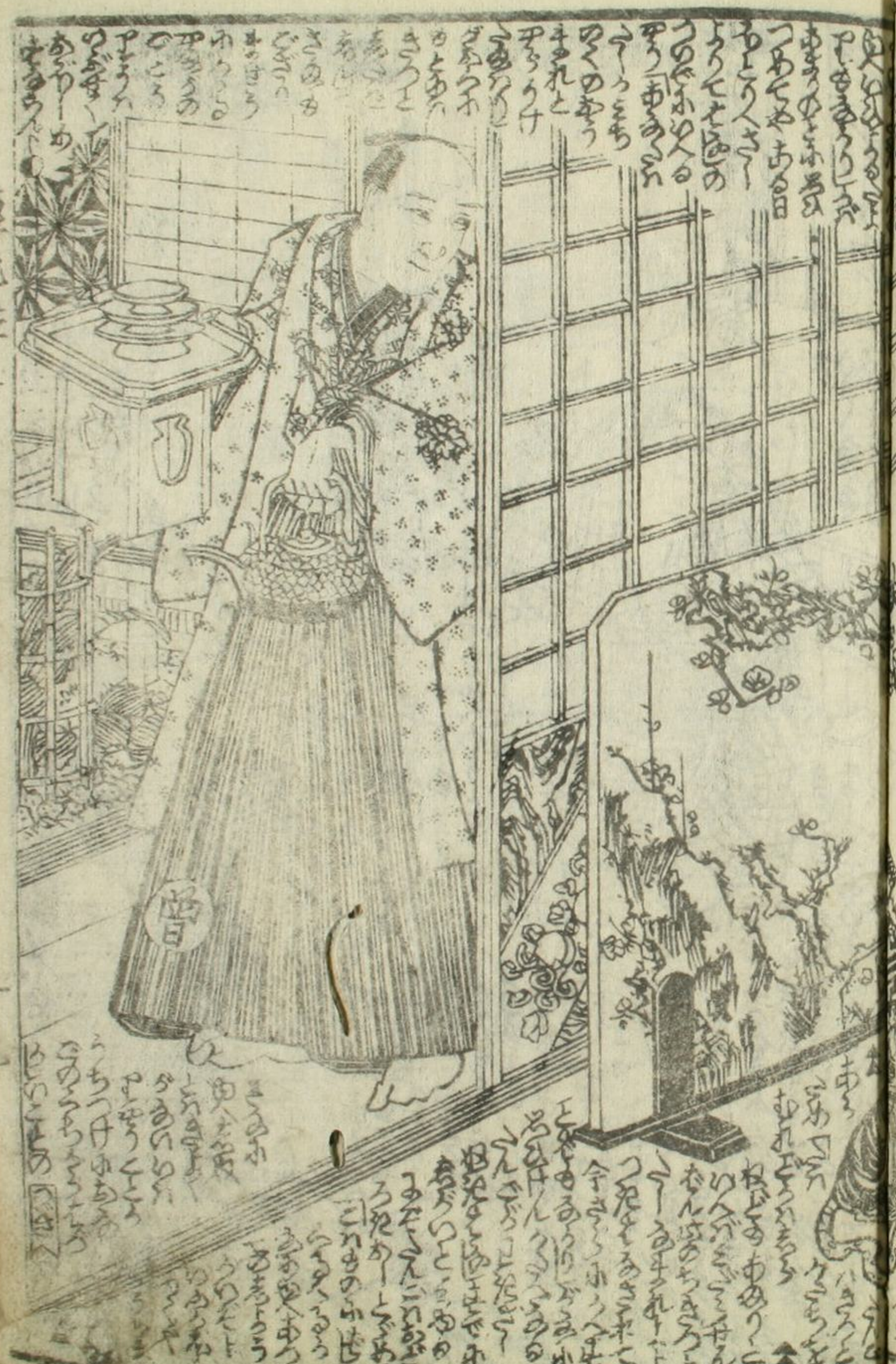
あつ市様
やん祈ん
二篇下







音
丹



010190518227

明治二年己巳陽春開板標目

新局九尾傳 七編 上編 爲永春水作 梅蝶樓國貞画

室町源氏胡蝶巻 十六編 十七編 十八編 十九編 種彦作 國貞画

筆海四國聞書 十一編 十二編 十三編 種彦作 國貞画

假名情談戀畦舎 四編 大尾 如皐作 國貞画

明鴉墨画迺禰福 十三編 十四編 十五編 種彦作 國貞画

童謡妙々車 廿二編 廿三編 廿四編 種彦作 國貞画

花封答玉章 十編 大尾 種彦作 國貞画

薄俤幻日記 十七編 十八編 十九編 春水作 國貞画

八犬傳犬の双紙 四十九編 五十編 五十一編 柳亭錄 國貞画

七ツ之宮飾譚 九編 十編 十一編 種彦作 國貞画

南傳馬町書丁目 蔦屋吉藏板

あさ